たはら歴史探訪クラブ

TAHARA History Inquiry Club

其の86

まぼろしの古窯、渥美窯5
～絵画文の壺のなぞ～

これまで、大アラコ古窯や東大寺瓦窯跡などの渥美窯では、当時の権力者や有力な寺院の注文によって製品が焼かれていたことを紹介してきました。今回からは、ほかの窯場とは異なる渥美窯の特徴を説明します。

渥美窯では、壺などに絵画文様を描くことが多くあります。その文様は、鳥、植物など、いわゆる「花鳥画」と呼ばれるものです。陶器の荒っぽい器面に流れるようなタッチで描かれた日本的な絵画文様。この集大成の作品が、神奈川県で見つかった国宝「秋草文壺」です。渥美窯で焼かれた壺としてはもっとも優雅な形をしている高さ42㎝のこの壺には、その名が示すとおり、口から胴部にかけて秋の景色がヘラで刻み込まれています。ススキ・ウリ・柳などの秋草やトンボなどの文様が壺をキャンバスとして大胆に描かれ、日本的な秋の風情を表現しています。美しく流れた自然の釉薬（陶磁器の素地の表面に施すガラス質の溶液）、窯の微妙な温度によって変化した味わいのある器の表面。これらは、普通の製品としてではなく、特別に依頼された「あつらえもの」だったことを感じさせ、渥美窯の製品を語るうえでの大きな特徴といえます。

▼美術工芸品として国宝に指定されている「秋草文壺」

この壺は当時、お墓の骨壺として使われたもので、なおかつ考古学的な調査、報告を経て世に出たわけですので、本来は考古資料として扱われるところです。しかし、その美しさから、考古資料としてではなく、美術工芸品として国宝指定を受けているのです。ちなみに、この壺は、中世の焼き物としては唯一の国宝となっていることもつけ加えておきましょう。

平安時代、藤原氏三代京都と並んで栄華を誇った奥州平泉。その平泉で開かれた儀式や宴の場で使われていた最高級品は、中国製の磁器でした。しかし、その次に位置づけられていたのは、渥美窯で焼かれた絵画文の壺であったことが、近年の発掘調査で明らかになっています。当時の有力者たちも、これら絵画文の壺の芸術的な美しさを認め、さかんに注文していたのでした。―つづく―

（増山）

▲日本的な秋の風情が表現された絵画文の様子

▼文化振興課
☎23局3635 FAX 22局3811